研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
C-139		21-325	慶應義塾大学　加藤眞三

題名（原題／訳）

The early impact of COVID-19 on the incidence, prevalence, and severity of alcohol use and other drugs: A systematic review

COVID-19 がアルコール使用や他の薬物の発生率、有病率、重症度に与える初期の影響について。システマティックレビュー

執筆者

Rose A Schmidt [1], Rosalie Genois [2], Jonathan Jin [3], Daniel Vigo [4], Jürgen Rehm [5], Brian Rush [6]

掲載誌

Drug Alcohol Depend. 2021 Nov 1;228:109065. doi: 10.1016

キーワード	PMID
COVID-19、医療サービスのニーズと需要、パンデミック、有病率、物質関連障害、系統的レビュー	34600257

要　旨

背景　本論文の目的は、COVID-19 の物質使用に対する初期影響を調べ、物質使用治療および支援システムの計画への影響を評価することであった。

方法　COVID-19 とそれに伴うロックダウン、自宅待機命令、社会的距離などの公衆衛生対策に伴う物質使用の有病率、発生率、重症度の変化をまとめるため、2021 年 3 月までに発表された文献の系統的レビューを実施した。

結果　母集団レベルでの物質使用の変化を記述した 53 の論文を同定した。大半の論文がアルコール使用に関する変化を記述しており、そのほとんどが、COVID-19 パンデミック時の消費量をパンデミック前と比較した自己報告による測定に依存していた。アルコール以外の物質使用の変化を支持する証拠は少なかった。一般に、リスクの高いパンデミック前のアルコール使用、介護の責任、ストレス、うつ病、不安、および精神障害の現在の治療が物質使用の増加と関連していることが明らかにされた。

結論　このレビューは、物質使用の変化に関する予備的データを提供し、COVID-19 パンデミックの初期に人口のある層がアルコール使用を増やし、害のリスクが高く、追加のサービスを必要とする可能性があることを示している。治療システムの観点からエビデンスに基づく迅速な対応を知らせるために，薬物使用に関する集団レベルの情報をさらに得る必要がある。